

英語科教育法 I (第 8 講)

話すことの指導



目次

- ▶ 4技能の中での位置づけ
- ▶ 授業での場面をどのように想定するか。
- ▶ Classroom English
- ▶ CEFRで示された英語力
- ▶ コミュニケーション能力



4技能の中での位置づけと2つのスキル

- ▶ speaking
- ▶ conversation
- ▶ public speaking

- ▶ 子どもたちの中では、どの技能を伸ばしたいかと聞くと、例外なく、speaking 能力を伸ばしたいと答える。その中でも、conversation 能力を上げたいのだと思われる。
- ▶ 他の技能のサポートがあって、speaking 能力は伸びてゆく。



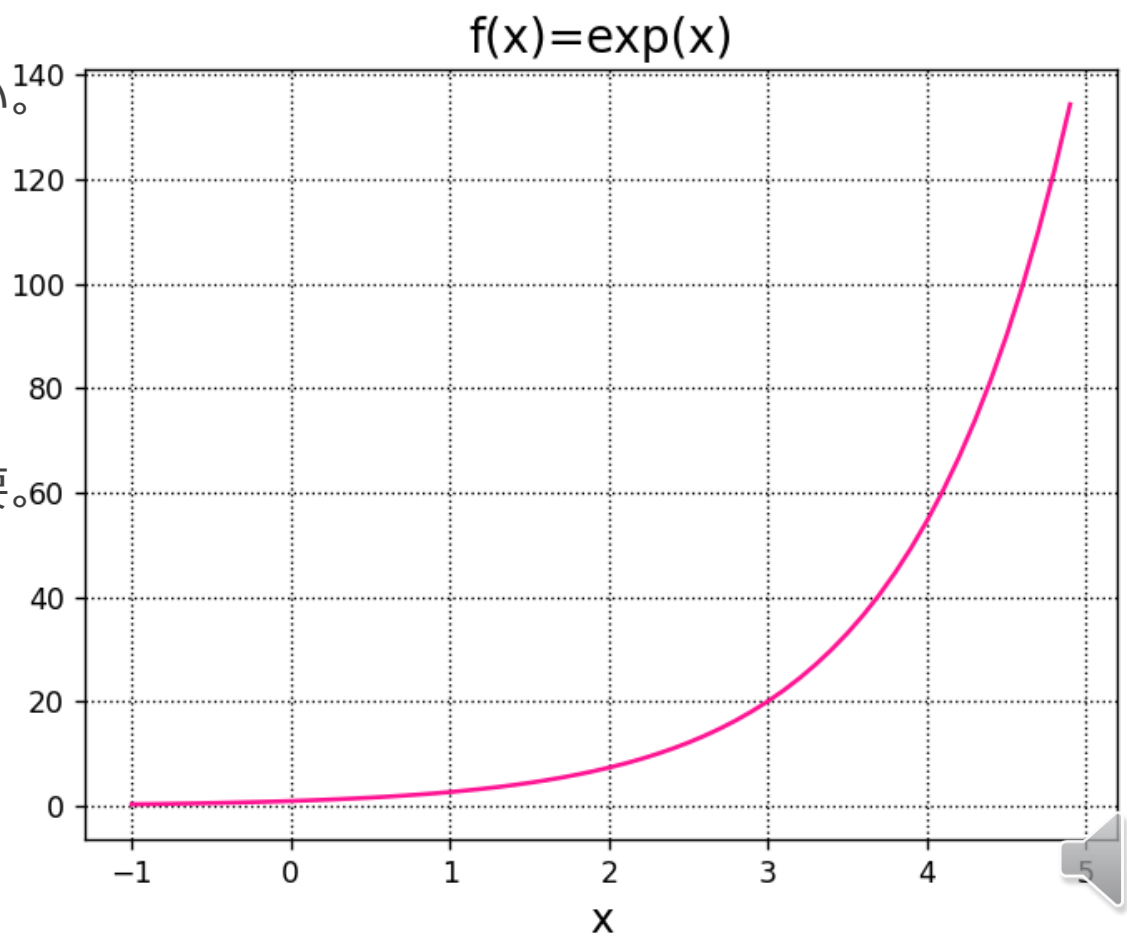
コミュニケーションの場面

- ▶ 授業で想定する場面は：
- ▶ できるだけ具体的なものが話題として相応しい。
- ▶ 特有の表現がよく使われる場面：あいさつ、自己紹介、買い物、食事、道案内など
- ▶ 児童の身近な暮らしに関わる場面：家庭での生活、学校での学習や活動、地域の行事、子どもの遊びなど



Speaking の指導(努力と伸び)

- ▶ 漠然と話す力を付けたいというのでは曖昧すぎる。
- ▶ どのレベルまで英語力をつけたいのが決めるといい。
- ▶ 縦軸を努力量として横軸を英語の力とする。
- ▶ 当初は少ない努力量で伸びるが、次第に鈍化する。
- ▶ 段々と努力しても目立った進展はなくなる。
- ▶ 95%の力の人が100%を目指すのは大変だ。
- ▶ その意味で、自分の目標レベルを決めることが必要。
- ▶ ネイティブレベルか、海外旅行レベルか？
- ▶ ネイティブレベルならば、全生涯をかける覚悟か？
- ▶ この図式は、Speaking だけではなく他にも適用。



話す話題について

- ▶ ある高名な評論家の例、最初は数行ほど関連ある話をしたが、それから強引に自分の得意な話しに持って行く。たとえば、演劇の専門家ならば、そちらの方に話しを持って行く。
- ▶ 学会などで、無理矢理手を挙げて、ゆっくりと立ち上がると何故か急に話すことが浮かんでくる。
- ▶ 海外での英会話サークルだと積極的な他国人に負けてしまうので、とにかく手を挙げるとか、とにかく、Well, Hi, May I ask? のようにとにかく始めてしまうのも手である。
- ▶ Interactive な時には、とにかく相手に話させるというのも手である。その場合は、適切な相づちが必要である。



小学校での話すことの指導内容

- ▶ 挨拶
- ▶ 身近なことで話題をはじめる。
- ▶ Classroom English を理解するようにする。
- ▶ 話す：ゆっくりとした繰り返しや言い換えに頼って、簡単な質疑応答に対応することができる。
- ▶ CEFRでは、Pre-A1 と考えられる。自分自身に関して短文を発することができる。名前、住所、家族、国籍など自分自身の情報を提示することができる。
- ▶ Can produce short phrases about themselves, giving basic personal information (e.g. name, address, family, nationality).



中学校での話すことの指導内容

- ▶ 関心のあることについて語る。
- ▶ 日常的なこと、具体的なことについて語る。
- ▶ 社会的な話題について語る。
- ▶ 高校生になれば、かなり抽象的な話題でも議論が可能であるが、中学校段階でも、ある程度はその準備を始めておく。
- ▶ CEFR: A1レベルと考えられる。人々や場所について、簡単でまた相互に関連しないフレーズを生み出すことができる。
- ▶ Can produce simple mainly isolated phrases about people and places.



正確さよりも流暢さ

- ▶ まず、正確に話そうとするよりも、流暢さを目指すようにするといい。
- ▶ 会話学校などでは、全然会話に参加しないで、あとで喫茶店に行ったりで、参加者の発話がbookishであると批判したりする人がいる。そんな批判している暇があったら、とにかく英語を話すことに努力すべきである。



コミュニケーション能力

- ▶ 学習指導要領で、コミュニケーション能力という言葉が登場したのは、1998年版からである。それ以来、学習指導要領では頻繁にコミュニケーションという言葉が登場する。これは学習指導要領に限らず、いろいろなところで見られる表現である。
- ▶ たとえば、平成15年(2003年)3月31日に発表された「英語が使える日本人」の育成のための行動計画では、「国際的共通語としての英語のコミュニケーション能力を身に付けることが不可欠です」という文言が見られる。文科省はコミュニケーション能力の育成に取り付かれている、と揶揄したくなるほどである。



classroom English

- ▶ Teach English in English
- ▶ Hello, everyone.
- ▶ Good morning, class.
- ▶ Let's review.
- ▶ Listen to me carefully.
- ▶ Please say it in English.
- ▶ Please line up.
- ▶ Take turns.
- ▶ Keep your books closed.



様々な活動

- ▶ pair work
- ▶ group work
- ▶ role play
- ▶ information gap
- ▶ interview
- ▶ discussion
- ▶ summary



相手を説得できるコミュニケーション能力

- ▶ 相手を説得できるコミュニケーション能力とは、実際のデータに基づいた、明快な論理に基づいた話を、堂々と顔の表情を豊かに語ることである。それゆえに、次の諸点が大事になる。
- ▶ (1) 事実を知っておく。数字などのデータを駆使して具体的に述べること。
(2) 説明が明快な流れにすること。自分の考えが論理的であるようにすること。
(3) 論理だけの流れでは冷たい印象をあてるので、適宜ユーモアを入れること、とりわけ、最初のice-breakingは必要である。
(4) 顔の表情、相手の目を見ること、手の動きなどは大切である。



学習方略

- ▶ 具体的な状況と結びつけながら発話練習をする。
- ▶ 類似の表現をまとめ、関連づけながら発話練習をする。
- ▶ 学んだ表現を使うことで、自らの理解を確認していく。
- ▶ 実際の会話経験を積む。
- ▶ 相手となるひとを見つける。(外国人、日本人でも)



課題

- ▶ 授業の始まりを想定して, classroom English ではじめなさい。
- ▶ CEFRとは何か説明をしなさい。
- ▶ Conversation とPublic speakingのそれぞれの活動が子どもたちの英語力の伸びにどのような影響を与えるか考えよ。

